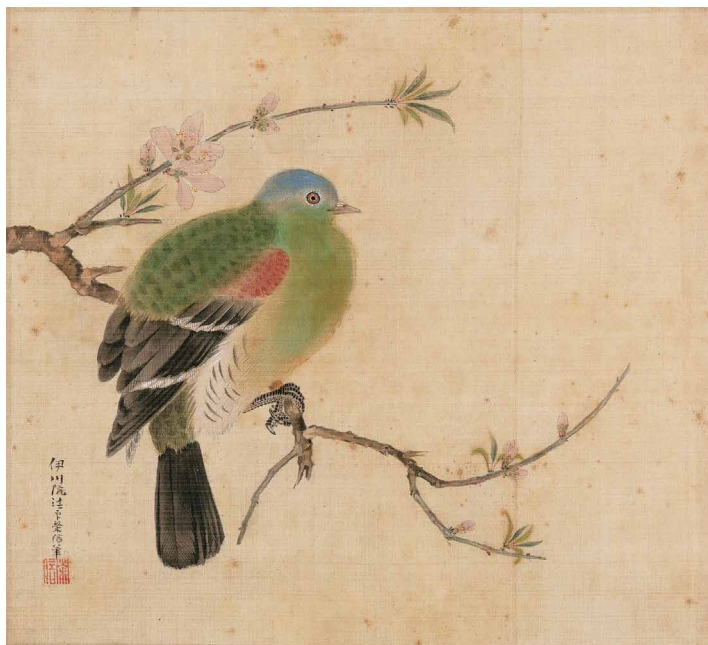


アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



(上) 狩野栄信・(下) 狩野養信
《唐画流書手巻》より
〔做徴示〕桃鳩図一、
〔做夏永〕楼閣山水図一

十八世紀末から十九世紀前半、江戸狩野派に大きな変革をもたらした、狩野栄信・養信の親子が合作したアルバムである。栄信と養信の図が、見開きで見られるように二十八図貼られている。各図には、徽宗、牧谿、馬遠、銭選といった、中国の宋元時代に活躍した巨匠の作とされる名品の図柄が描かれており、僅かに栄信風、養信風にアレンジされながらも、原本の格調高い趣を損なわないように、細心の注意が払われている。栄信よりも前の時代に注目されてこなかった図柄も含んでおり、本作は、当時の大名ら、古典名画を愛する鑑賞者たちの眼を愉しませたに違いない。色彩の明度が高くカラフルで、制作されたばかりのように鮮やかな色合いが美しい。栄信、養信が江戸狩野派の新様式を確立したことを示す記念碑的な作品である。

(上席学芸員 野田麻美)

No.
144
2021年度 | 冬 |

浜松の人浜松を歩いてみると

館長 木下直之

これを書いているのは二〇二一年十一月下旬、みなさんの目に触れるのが翌年正月、したがって、今もその時も、これから紹介する「浜松の人浜松を歩く」という展覧会はこの世に存在しません。十一月十三日開幕、十二月十九日閉幕です（でした）から。

期間限定の展覧会とはそのようなもの、だからこそ何を置いても出かけなければならぬと、このごろ強く感じるようになりました。「このごろ」とはいつなのか。死期が迫って来たので、とまでは言いませんが、人生の終盤に差し掛かってくると、今のうちに見ておかなければという気持ちが強まります。同じことは文学や映画にも言えるのですが、それらが本やビデオ（いやネット）でいつでも見られる環境にあるのに対して、美術はそうは行かない。本で目にする絵は、本で読む文学とは違いますから。

さらに「このごろ」はオンラインが大流行です。買い物も学校の授業も何

でもかんでもオンラインですから、展覧会だって「おうち」で鑑賞すれば十分というわけです。コロナ禍ではそれが「安全安心」という理由だったのに、やがて、その方が身体を動かさず楽だからとなりつつあるように思います。

さて、浜松市美術館で開催する（された）「静岡県立美術館超名品展 風景と人間」に便乗し（悪乗りし）、「超私的企画 浜松の人浜松を歩く」を企て、庇を借りて母屋ばかりか離れ（第三展示室）まで乗っ取る結果となりました。その一端をご紹介します。

浜松市美術館の「遠州の民藝」展（昨年開催）に刺激されて、浜松近郊の積志村にわずか二年間だけ存在した日本民藝美術館に注目、一九三〇年代前後の浜松の文化を振り返りつつ、私の生まれ育った一九五〇年代にも目を向けようと考えたのですが、千葉繁（『造化機論』の訳者）、賀古鶴所（森鷗外の盟友）、山葉寅楠（ヤマハ、すなわち日本楽器の創業者）、高林兵衛（和時計

コレクター）、木下恵介（怪作映画「女」には妖しい浜松がほのめかされている）、鈴木則文（ご存じ映画「トラック野郎」の監督、著書に『下品こそ、この世の花』あり）ら私の頭に浮かんだ「浜松の人」たちはだんだんと姿を消し、結局は、ひとり残った内田六郎の背中を追いかけることにしました。

展覧会は次の四部構成、一「先人内田六郎の足跡」、二「谷島屋タイムスを読む」、三「美術館と浜松駅の間にあるもの」、四「わたしの城下町」。

浜松市内の開業医だった内田六郎は、大津絵、ガラス絵、泥絵、長崎・横浜浮世絵など、異国情緒あふれる民衆的な造形表現に魅せられました。『家藏江戸版和蘭絵』（紅日書楼、一九三六年）、『硝子絵』（双林社、一九四二年）などの著作があります。ずっとのち、内田コレクションを中核に浜松市美術館が誕生したのは昭和四十六年（一九七二）のことです。

当時、高校生だった私のいわゆる「下

手物」（柳宗悦はこれを「民藝」に呼び替えた）への関心は、間違いなくこのコレクションに触発されました。大学生になった私の望んだ就職先は神戸市立南蛮美術館だったのに、ボタンをかけた館に入ってしまったという思い出があります。それからきょうまで、図式的に示せば、下手物から見世物へ、見世物から作り物へと関心を移し、美術の支流を巡る旅を続けて来たように思います。

昭和五年（一九三〇）に商品陳列所を会場に「泥絵の展覧会」を主催したのは谷島屋書店でした。そのころ、この書店は「谷島屋タイムス」というタブロイド新聞を刊行していました。「浜松の文化の窓」を標榜した紙面でありわけ興味深い記事は、岩崎覚「静岡を想ふ」です。九年暮らした静岡から浜松に移り住んだ岩崎は、飛行機の爆音と工場から鳴り響くサイレンに驚いてしまいます。「逞しい労働者の筋肉の引緊る響きのやうで、いかにも気持ちがいい」と好感を抱いたものの、しんと静まり返った静岡の生活を懐かしがっています。それほど当時の浜松は喧騒に溢れていたようです。

過去の風景を振り返る時、音が抜け落ちてしまうことを教えられました。

コロナ禍のボランティア活動について

上席学芸員 植松 篤

当館のボランティアは、活動内容が異なる七つのグループで活動しています。各グループについて述べると、創作関係のイベントを補助する実技室グループや学校団体に対応する学校グループ、来館者と対話型鑑賞を行うギャラリートツアーグループ、目の不自由な方の触覚による彫刻鑑賞をガイドするタッチツアーグループ、地域と連携したイベントなどを行う地域連携・草薙ツアーグループなど、教育普及にかかわるものが多くあります。その他にも学芸員の研究活動を支える資料整理グループや、図書閲覧室の開室などを行う図書閲覧室グループもあります。ボランティア活動は多岐にわたり、当館にとってなくてはならないものとなっています。

上記で触れたように、ボランティア活動では利用者と接する機会が多く

あります。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大は、そうしたボランティア活動を大きく制限することとなりました。昨年四月から五月にかけての臨時休館が明けて以降、展覧会については継続して開催することができていますが、ボランティアも多くかかわる教育普及活動は困難な状況になり、美術館活動の一角が縮小されたと言えます。コロナ禍により、講演会などのトークイベントや創作体験活動、学校団体の受入などの中止、人数制限をせざるをえない状況になりました。他方、オンラインによる実施の試みがあったことは、積極的な出来事として付け加えておきたいと思います。

ボランティア活動は、昨年四月に一度全ての活動が休止となりましたが、六月からは一部の活動が再開されました。しかし対話を主とする学

校グループやギャラリートツアーグループ、接触を伴うタッチツアーグループは休止されたまま、今年九月から工事休館に入りました。ギャラリートツアーグループは、作品についての知識を深めつつ、再び来館者と対話できる日を待っています。また、地域連携・草薙ツアーグループは、プロムナードにある茶園の管理を継続しています。比較的影響が少なかったのは、図書閲覧室グループと資料整理グループです。

このような活動状況のため、グループによっては任期三年のうち、実質的には一年ほどしか活動いただけではない場合があります。そうしたことから、今回は特例として、希望者には任期を一年延長していただけることにしました。結果的には多くのボランティアにご希望いただき、次年度も引き続き活動いただく予定で

す。付け加えますと、ボランティアの任期延長にともない、次期の募集は令和四年度に行う予定です。募集を心待ちにしていた皆様には恐れ入りますが、もう一年お待ちください。

従来の活動が再開できることを願っていますが、コロナ禍の状況が続く懸念もあります。そのため、従来の活動の代替として、新規に「SNS広報」という活動を立ち上げ、また他グループから図書閲覧室グループの活動へ参加できるようにしました。前者は、ボランティアにおすすめの作品についての文章を執筆してもらい、当館フェイスブックに掲載するものです。いわゆる解説に傾くことなく、それぞれが感じ、考えたことを文章にさせていただいています。読者の皆様も時々フェイスブックを覗いていただければ幸いです。

開館前年より始まる当館ボランティア活動は、体制を変化させながら三十二年続いてきました。これからも、社会の状況や要望を汲み取りながら、地域や来場者、ボランティアのつながりを大切にしていきたいと思えます。

二〇二一（令和三）年度の大規模修繕について

三十五歳。人間だと、もうぼちぼち健康診断の結果が気になり始める頃かと思えます。建築物の場合、人間と違って自力では再生してくれませんかから、定期的にメンテナンスしてあげないと、色んなところに不具合が出てきてしまいます。

という訳で、一九八六年に開館した当館も、半年ほどお休みを頂いて大規模修繕を行なっています。ここに至るまでには、中長期にわたる修繕の計画があり、その計画を立てるために調査をして、調査の準備として不具合箇所を確認して……等々、準備作業の積み重ねの結果、ようやく工事の本番を迎えることが出来ました。

どこを直しているのか、お話ししているときりが無いので、大きなところを二カ所だけ。

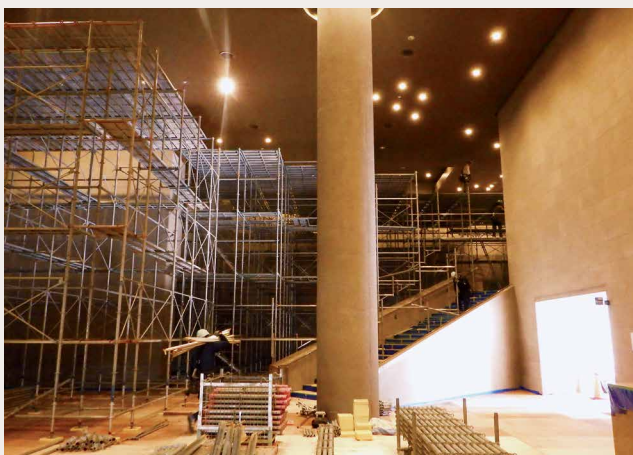
一つ目は、エントランスホールの天井です。皆さんが美術館に来た時、真っ先にお入り頂く、大きな吹き抜けの空間です。

この場所、吊り天井と申しまして、建物の躯体から吊り下げた金属の格子に、天井用のボードを貼り付けた構造になっています。二〇一四年に政府によって新たな耐震基準が設けられました。この度当館もこの基準に合わせた強度の天井に張り替えることが

出来ました。

折角天井を取り換えるので、照明環境も一新することになりました。元々、エントランスホールが竣工した頃には、LED照明などというものは存在せず、当時としては最新鋭のハロゲン電球で、この大空間を照明していました。その後、東北の大震災等の時期を経て、省エネ節電が必要となり、床を照らしているダウンライトと呼ばれる器具を、LEDに交換しました。

この交換、節電にはなったのですが、実はLEDというのは独特のくせがあります。単に節電出来るだけじゃないんです。その特徴の一つに、「LED



エントランスホールに足場を設置中

の明かりはまっすぐ飛ぶ」というものがあります。例えば蛍光灯のような光源は、灯具の回りをほんわか照らし出すように光るのですが、LED灯具から出た光は、元々設計した方向にしか飛んでいきません。このため、LEDの光が目に入ると、非常に眩しく感じます。

かつての交換では、ハロゲン電球のあった場所を単にLED器具に置き換えただけだったので、ホールの天井にはチカチカと輝くライトが並び、実は結構目には厳しい空間でした。人間の目は優秀で、気が付かないうちに慣れてしまうのですが、負担が無くなる訳



壁塗り準備も進めています

ではありません。

今回の修繕では、ダウンライト照明の数を減らし、その分壁面の間接照明を増やしますから、壁面全体がふわっと光るような空間になると思います。

二つ目は、本館展示室です。展示室の壁は、これまで随分と酷使されてきました。展示の度に、異なる場所に釘が打たれ、ビスが刺さり、それらを完全に補修する間も無く次の展示にかからざるを得ず、お客様からは、「これはいかに何でも、あんまりではないか」というお言葉を賜ることもありました。申し訳ありません。今度の工事では、壁面をしつかり整え、塗り直しますから、きれいな展示室でお目にかかることが出来る筈です。

本館展示室で、もう一つ行なうのが、照明器具の総入れ替えです。これまで当館では、建設当時以来のスポットライトを、ずっと使い続けてきました。もうあと二十年もしたら、それ自体が博物館資料になりそうな品です。一部、「新しいライトが導入された!」と言って喜んだ器具もあったのですが、これも十五、六年前の話になってしまいました。

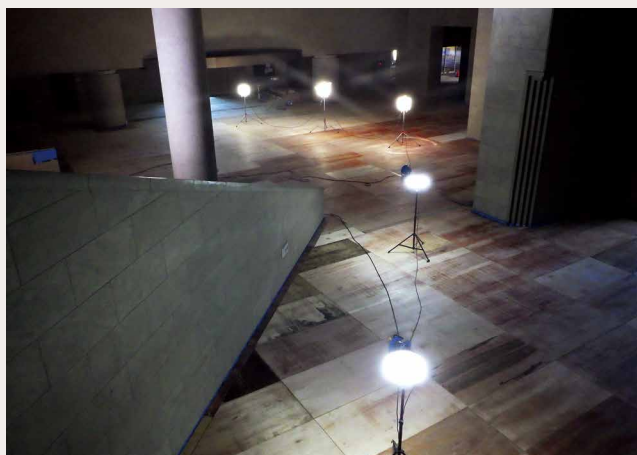
これまでのライト、美術館建設当時は最新鋭の照明器具だったのだからと思われのですが、今日の基準で言う

と、どうも、なかなか。先に申し上げた通り、LEDの照明器具は、設計したところに光を届けるように作られています。特に美術館用のスポットライトは、照らしたい場所をムラなく照らしながら、光の中心部から外側にかけて、なだらかに弱くなるよう、気を配っているのです。

また、LED照明は照度を落としても、つまり光を弱くしても、案外ものが良く見える、という性質があります。古いハロゲンという明かりは、暗くしていくと、どんどん色味が赤っぽくなってしまいます。夕暮れ時の陽の光を思い浮かべて下さい。

LEDなら、暗くしてもあんまり色味を変えずに済むので、光に弱い作品に合わせた弱い照明でも、画面をすっきりとご覧頂くことが出来ます。古い写真や版画、紙に書かれた素描等、繊細な表現をお楽しみ頂きたい作品なのに、灯具故にそれが出来ず、菌瘻い思いをしておりましたが、今後はかなり改善することが出来るそうです。

美術館や博物館用のLED照明器具そのものは、しばらく前から国内で流通していました。ハロゲン照明に比べて、対象に熱線を出さず、紫外線による害が無い、と言われているのも、LED器具が色んなところで導入された

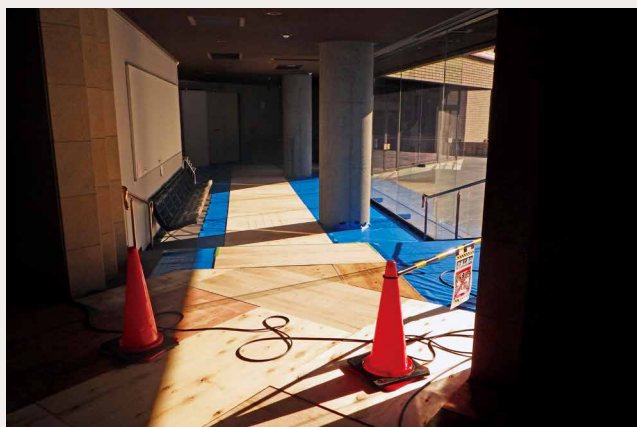


仮設照明が灯りいつもの全く違う雰囲気のエントランスホール

理由の一つです。

ですが、これもLED照明の特徴で、色の再現性という点で、不満の残る製品が散見されていきました。一見綺麗に見えていても、太陽の自然な光と比較してみると、「あれ?」と言いたくなるくらい、全然違った色味になっていたりしたのです。絵画作品をご覧頂くことの多い美術館としては、これは致命的です。

今回の工事に向けて、当館では何年かけて、照明器具の選定を行なってきました。その間に起きた技術の進歩にも、どうにか追い付いてきたと思います。次に作品をご覧頂く時には、一



県民ギャラリーへ向かう通路にも資材運搬用の養生を設置

新された環境下で、ご鑑賞頂けるようになっていくことでしょう。

さて、今年度の修繕は順調に進んでおりますが、「ここを直さなければなあ」という箇所は、残念ながら他にもあります。皆さんの財産である美術品を末永く未来に伝えていくためにも、美術館のハードの修繕はこれからも進めていきたいと思えます。

来年度以降も当館は、館蔵品を核に据えながら、様々な美術作品をお目にかける予定です。今後の当館活動、どうぞお楽しみに。

(上席学芸員 新田建史)

温泉と絶景

—熱海本陣・今井半太夫家と画家たちの交遊—

主任学芸員 浦澤倫太郎

碑文に記されるように、駿河、伊豆、相模、武蔵をはじめとした十カ国が見渡せることから、後世十国峠とも呼ばれ、今もなお観光地として賑わいを見せている。

この日金山に自ら登り、更に頂上からの眺望をもとに絵を描いた江戸時代の画家が幾人か知られている。実は彼らの作品の中には、後述の様に、画中の賛や画家本人による紀行文により、日金山登山以前に、麓にある熱海に滞在していたことが明らかになる場合もある。

当時の熱海では、源泉たる大湯間欠泉の湯が分配される湯戸という宿が軒を連ね、江戸を中心に多数の湯治客を集めていた。市街は相模灘を臨む斜面に広がり、高層ホテルが林立する現在では想像しがたいが、至る所から絶佳な海景を見渡すことができた。それ故、眺望自慢の宿も多く、特に本陣であった今井半太夫家と渡辺彦左衛門家は江戸で評判になった。また湯治期間は三廻り(二十一日間)が基本とされたこともあり、人々は滞在中、温泉ばかりでなく伊豆山権現や錦ヶ浦などの名所巡りも存分に楽しんだ。そのハイライトこそ日金山登山であり、先の画家たちもこの定番ルートを辿ったのである。

さて、従来あまり注目されてこなかったが、熱海に滞在し日金山に遊んだ画家の中には、先の今井家に宿泊または訪問し、その主人と親交を結んだ者もいた。本稿では日金山の眺望が画題として成立する背景にあった、画家たちと今井家の交遊の一端を明らかにしたい。

今井家の当主は代々半太夫を名乗った。同家は江戸時代を通じて多くの大名の逗留先となり、更に熱海の名主を務めるなど、当地の歴史において重要な位置を占める。その敷地は大湯間欠泉に隣接し、また一碧楼と名付けられた離れに代表される、洗練された建築と卓越した眺望は、熱海滞在を題材にした江戸時代の紀行文でもたびたび賞賛されている。

加えて一碧楼には人見竹洞揮毫の額をはじめ、多数の書画が飾られていた。

この今井家と関係を持った画家の一人に津山藩士でもあった広瀬臺山(宝暦元「一七五二」年—文化十「一八一三年」)がいる。臺山による日金山からの眺望を描いた作品として『日金山頂望芙蓉図』(東京国立博物館蔵、図1)や『富嶽真景図 壹・式』(岡山県立博物館蔵)が知られている。『日金山頂望芙蓉図』では東の相模灘と真鶴半島の眺望と、西の駿河湾と富士山の眺望を一つの画面に合成して描いている。画面右上には

日金山頂望芙蓉

峯圖

巳未四月寫于熱

海客舎與主人今井

張盈

美作臺山源清風

との款記があり、本作は寛政十一(一七九九)年四月に、熱海の宿で描かれ、その主人「今井張盈」へ贈られたことが分かる。

臺山と親しかった儒学者・松崎棟堂(明和八「一七七二」年—天保十五「一八四四」年)は、遠江掛川藩の藩校教授として登用される前年の「享和紀元(一八〇一)某月、『今井齋齋畫像記』を記している。冒頭は次の通りである。畫人源清風之浴熱海湯也。或請寫里人齋齋之眞者。曰。翁食我衣我。卑我家與室。使我不去墳墓。恩不忘也。願傳容于後。清風既圖而與之。請余記其事。(以下略)

これによれば、臺山が熱海に訪れた際、とある人物より、恩を受けた今井齋齋の容貌を後世へ伝えることを目的に肖像画制作を依頼された。この肖像画への賛として臺山が棟堂に求めた文章がこの『畫像記』である(ただし執筆当時、棟堂が齋齋と面識があったかは不明)。



図1 広瀬臺山《日金山頂望芙蓉図》東京国立博物館蔵

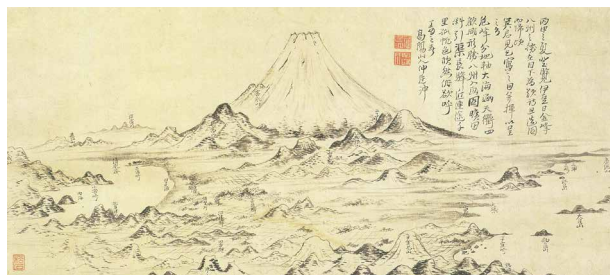


図2 中山高陽《八州勝地図》個人蔵

更に続けて、十数年前に関東で起こった飢饉の際に、齋齋が民衆に対し金銭を貸し、穀物を分け与えたこと、雁皮紙製造を始めたことなど、徳業の数々を紹介する。また齋齋の名は利和で、当時、齢七十頃であったという。齋齋の生没年は不明であるが、十八世紀後半に今井家当主として活躍したとみられる。

今井家による雁皮紙製造の話は他の史料にもみられ、儒学者・柴野栗山の助言により、周辺に自生する雁皮を利用し、閑散期の事業として敷地内で始められたらしい。製造工程は客の見物対象となり、製品は江戸でも販売され好評であった。ちなみに栗山には日金山の眺望を詠った一篇があるが、これとほぼ同文を栗山が着賛した谷文晁『日金山絶頂真景図』(所在不明)や、この文晁作品の画を大岡雲峰賛を儒学者・大蔵謙斎が写した『日金山富嶽眺望図』(当館蔵)が知られている。

齋齋の肖像画は行方不明だが、先述のように臺山は『畫像記』執筆と同年に今井家に逗留

留し(日金山頂望芙蓉図)を「今井張盈」に贈っていることから、肖像画も同時期に熱海の注文主に納められた可能性もある。ただしこの「張盈」が箋斎であるとは限らない。翌年熱海を訪れた成島司直は既に箋斎が病の床に臥せていたと述べる。その二年後、既に掛川藩儒であった謙堂も、後に第四代藩主となる太田資言に付き従って熱海を訪れ、今井家に逗留し、箋斎に面会したが、既に家督を息子の有忠に譲っていたと紀行文『游豆小志』に記す。代替わりの時期が不明なため、主人たる「張盈」は息子・有忠を指す可能性もある。ちなみに司直も謙堂も滞在時に日金山へ遊んでいる。

司馬江漢(延享四「一七四七」年—文政元「一八一八」年)も箋斎と親しかった。江漢は生涯に何度か熱海を訪れ、今井家を定宿としていたようである。天明八(一七八八)年の長崎への旅を記録した版本『西遊旅譚』(寛政六「一七九四」年刊)と自筆本『江漢西遊日記』(文化十二「一八一五」年成立、東京国立博物館蔵)には往路の途次、熱海に滞在したことが述べられる。『江漢西遊日記』のうち今井家到着の翌日、初めての入浴を記した四月二十七日の記事欄外に以下のような書付がある。

熱海へハ其後四五度モ行ク、一昨年半太夫方にて入湯せし時、二代目也、前ノ半太夫ハ甚タおもしろき人なりき

『西遊日記』成立時期や前後の文脈から判断すると「二代目」とは有忠、「前ノ半太夫」は箋斎を指すとみられ、その人柄を絶賛している。江漢は翌五月まで今井家に逗留した。五日、節句なり、四時より雨、後大雨、額一面堅物一幅出来ル、半太夫父子礼に来ると、作品を半太夫親子に贈った。更に七日には日金山に登り、翌八日の項には

日金山山頂の景色をうつす、屏風に山水を認め、宿より蕎麦を贈ル
と記され、再びの揮毫に加え、日金山の山頂

(「円山」)からの風景を描いたこともわかる。『西遊旅譚』にはこの記述を想起させるような山頂四方の眺望を描いた挿絵が掲載されている。この後江漢は熱海を發ち、再び日金山山頂へと至り、西側の軽井沢(現在の函南町軽井沢)へ降った。

更に時代を遡る箋斎と交流した画家として、土佐出身の中山高陽(享保二「一七一七」年—安永九「一七八〇」年)が注目される。高陽は一七七六年六月から七月にかけての熱海滞在を記録した『熱海紀行』において、江戸屋という宿に逗留していたものの、七月三日、今井家にも足を伸ばしたことを述べる。

三日 午前今井亭にて諸氏の題言を見る。妙なるは少なし。伊豆全図を見る。温泉縁起なるものはいづれ信(じ)がたし。晚日、今井生が求(め)にて山水を写(し)与ふ。「中略」且つ自ら日金図を造る。

と、同家に飾られた様々な書画を見物し、更に「今井生」の求めに応じて、江漢や臺山と同じく自身の作品を贈っている。先の謙堂の記述からこの頃箋斎は四十代頃とみられ、この「今井生」も箋斎である可能性が高い。

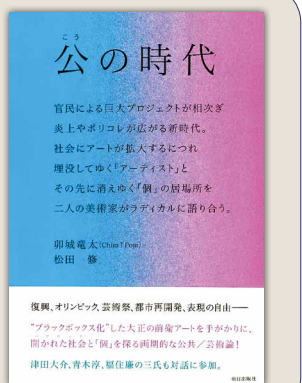
また「自ら日金図を造る」とあるが、遡る六月二十四日に高陽は滞在中三度目の挑戦で日金山登頂を果たしており(一、二度目は悪天候で断念)、これが「日金図」制作の契機となったとみられる。今に残る高陽の日金山の眺望を描いた作品に熱海訪問の翌年に描かれた《八州勝地図》(図2)がある。鳥瞰視点を取り、伊豆半島北部や富士山、更には伊豆七島までを一つの画面に収めているが、相模灘沿岸や伊豆七島の描写には、日金山からの実景を反映させているとみられる。この他、熱海旅行と同年に描かれた類似作品もある。箋斎は風紀の維持や、日金山への道標となる石仏の建立など、地域振興にも力を入れた。箋斎や今井家にとって、本稿で見えて

た江戸の画家たちとの交遊は、自家と熱海の発展にも有意なことであったであろう。

このように幾人もの画家が訪れ、彼らからの贈品を含む多数の書画を蔵していた今井家であるが、文政期以降火災に遭い、なお存続するも、明治期に廃業した。敷地は宮内省の療養施設、更に民間のホテルとなり、今は跡形もない。

静岡県内では、画家たちと関わりの深い家として、原宿の植松家をはじめ、東西を結ぶ東海道沿いに位置する家が知られてきた。熱海の場合、屈指の湯治場として発展し、その中核であった今井家に多くの文人墨客が集った点に特色があるといえる。本稿で取り上げた以外にも様々な画家と交流があった可能性は高い。またこの温泉地としての繁栄の延長線上に、日金山の絶景という新たな画題が誕生する契機があった点も重要であろう。

- 1 福士雄也「富士見のトポスとその変遷」発見される「富士山」『富士山の絵画展』静岡県立美術館、二〇一三年
- 2 成島司直『熱海紀行』、享和二(一八〇二)年成稿、写本は熱海市立図書館蔵安積良高『游豆紀勝』天保五(一八三五)年(安藤智重『遊豆紀勝』東省統録、安積良高、明德出版社、二〇一八年)
- 3 熱海市史編纂委員会編『熱海市史 上巻』、熱海市、一九六七年
- 4 『権堂遺文』上、松崎健五郎、一九〇一年
- 5 明治時代に当時の今井家当主が提出した「熱海六名代々手控抜書」(熱海郷土文化研究会、一九五六年)や成島司直『熱海紀行』(註2)に詳しい。註1参照。
- 6 成島司直『熱海紀行』(註2)
- 7 『松崎権堂全集 三』、冬至書房、一九八八年
- 8 『司馬江漢全集 第一巻』、八坂書房、一九九二年
- 9 清水孝之校注『中山高陽紀行集』、高知市教育委員会公民課、一九五七年
- 10 細野正信「中山高陽—その生涯と作品—」『MUSEUM』三三二号、東京国立博物館、一九六九年
- 11 註2成島司直『熱海紀行』
- 12 明治期以降の今井家の動向は次に詳しい。
- 13 山田芳和『名主 今井半太夫の足跡』、二〇〇六年



本の窓
卯城電太、松田修著
『公の時代』
朝日出版社 二〇一九年

アーティスト集団 Chin'Pom の卯城電太(一九七七年)と、現代美術家の松田修(一九七九年)による対話本。現代の作り手として表現を模索する中で、彼らの関心が日本の美術史へと遡っていくのだがとりわけ面白い。彼らの考えるアーティストとは、集団(公)の中でこそ存在しうる「個」の究極形であるという。世の中が社会性やモラルを求め、公権力が検閲をかける現代を生きるアーティストたちは、戦後民主主義下で求められた岡本太郎を代表とする「エクストリームな個」にはシンパシーを感じない。むしろ大正期末、思想や表現が取り締まられ「公の時代」がエスカレートする中での前衛運動における個の役割に注目し、表現の手がかりを探る。大正期とは異なり「公」の上からの圧力だけでなく、市民から発せられる下からの監視も強い時代を生きる表現者の、切実な声を聞くことができる。
(上席芸芸員 川谷承子)

コロナ禍と休館を通じて

主幹 奥村祐喜

私にとって静岡県立美術館は、学生時代から機会があるごとに展覧会の鑑賞や、博物館実習も受講させていただいた施設です。

その中でも特に思い出深いのは、博物館実習中に見たロタン館の巨大な「地獄の門」です。現在の場所に設置される直前で、横倒しになっている状態でした。三十年近く前のことではありますが、未だに覚えています。

その美術館に今年度から教育普及担当として赴任することとなりましたが、例年美術館が行う活動内容とは異なることが多くありました。

本年度は後半の半年間にわたる休館が予定されていたため、実技室プログラムの回数も例年に比べ半分ほどの予定でした。そのプログラムも新型コロナウイルス



沼津市大瀬神社に奉納した作品を背景に

ス感染症の影響で幾度も中止と なったり、美術館教室のプログラムの中には前年度のパフレット

ですでに中止となっていたりするものもありました。

しかし、その中でも開催できた「ねんど開放日」では、親子が夢中になって粘土で思い思いのものを作っている姿「創作週間」の時に時間をかけて制作した自分の完成作品を、他の方と見せ合いながら喜んでいる姿を見ていると、来館者の皆様にとってこの美術館が長く心の拠り所になっていることを感じました。また、「ちよこつと体験」ではスタッフが来館者に声をかけ、何げなく立ち寄った親子が喜び合いながら制作に取り組み、最後には「ありがとうございます。やって良かったです。」とお礼をいっていたこともありました。そんな来館者の皆様の幸せそうな場面に関われることの喜びと責任を感じています。

この度のコロナ禍をマイナスとみるのか、発想の転換のチャンスと見るのか、実技室のプログラムの今後のあり方をコロナ禍と長期の休館を通して考え直すことができるのではないかと思います。私だけでは微力ですが、来年度は新たにスタッフの皆さんやボランティアの方々の力を借りて、精一杯頑張っていきたいと思えます。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

休館のお知らせ

令和4年3月31日(木)まで設備改修工事のため休館

2022年度企画展年間スケジュール

大展示室展

4月2日(土)～5月15日(日)

兵馬俑と古代中国～秦漢文明の遺産～

6月18日(土)～8月28日(日)

絶景を描く—江戸時代の風景表現—

9月10日(土)～10月23日(日)

鴻池朋子展(仮)

11月3日(木)～2023年1月9日(月)

近代の誘惑—日本画の実践

2023年2月18日(土)～3月26日(日)

※展覧会名、開催期間は、いずれも予定であり、変更となる場合があります。

友の会のご案内

入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。